

パリの街角

文学散歩
佐藤昌著
三修社

パリの街角——文学散歩

佐藤 昌

三修社

写真提供

向田直幹

フランス大使館

フランス政府観光局

パリの魅力

シテ島とサン・ルイ島

- ノートル・ダム寺院 22
- ノートル・ダム広場 26
- 新聞発祥の地 27
- 金銀細工師
- 河岸 28
- 王太子広場 29
- 新橋 30
- コンシエルジュリー 31
- 司法庁 34
- 両替橋 37
- 花の河岸 38
- ブルボン河岸 41
- ポーランド文庫 42
- 二橋町 44
- ローザン館 45

カルチエ・ラタン

- 小塔河岸 53
- サン・ジュリアン・ル・ポール教会 55
- カヴォ・デ・ズブリエ
- ット 57
- 麦わら街とブッシュリ街 58
- モーベル広場 59
- サン・ジェルマン大通り 60
- ソルボンヌ 61
- ソルボンヌ広場 63
- ペギーの「半月手帳」社 64
- 学校街 65
- コレージュ・ド・フランス 66
- ヴィヨンの立像 69
- 理工科大学 70
- サン・テチエンヌ・デュ・モン教会 71
- ヘミングウェイのアパート 74
- バスカル終焉の地 76
- アンリ四世校 76
- ヴェルレーヌの没した家 77
- デカルトの住んだロラン街 79
- ムフタール街 81
- 『ゴリオ爺さん』の下宿 82
- 高等師範学校 84
- パントオン 85
- 聖ジュヌヴィエーヴ図書館 86
- ルイ・ル・グラン校 88
- サン・ミシェル大通り 88

リュクサンブール公園周辺

- リュクサンブール公園 93
- ジイドの出生地 98
- オデオン座 100
- オデオン広場 103

ムッシュユル・ブランヌ街104 「コルドリエ・クラブ」のあった医学校街105
 オデオン街の二書店106 サド侯爵の生まれたコンデ街108 ドーデの住んだ「元老院ホテル」110 ラ・ファイエット夫人生誕の地111 サガンの住むギヌメール街112 フルーリュス街114 サン・シュルピス寺院115

サン・ジェルマン・デ・プレ界限

ボードレール誕生の地123 カミユの住んだセギエ街124 革命小路125 文学カフェ・プロコップ127 サン・ジェルマン・デ・プレ教会129 デイドロ坐像133
 プラスリー・リップ135 実存主義のメッカ「ドウ・マゴ」と「フロール」136
 スタンダール研究者の書店「ル・デイヴァン」141 バルザックの印刷所141 美術学校142 ワイルドの没したホテル143 アナトール・フランスの生家145 フランス学士院147 ネールの塔149

モンパルナス

ヴァヴァンの交差点153 ボーヴォワール生誕の地155 リルケの住んだ家157
 『ジャン・クリストフ』の書かれた家159 文学カフェ、クロズリー・デ・リラ160
 シャトープリアンの旧居161 カタコンブ163 ポール・ロワイヤル164

フォーブール・サン・ジェルマンからエッフェル塔へ

ヴォルテール河岸169 スタンダールの『赤と黒』172 ロダン博物館175 廃兵院176
 エッフェル塔とモーパッサン177

ルーヴルから凱旋門へ……………

- ルーヴル 183 チュイルリー公園 189 コンコルド広場 190 シャンゼリゼ大通り 193
 パイヴァ館 198 凱旋門 200

・モンマルトルからサン・マルタン運河へ……………

- 「赤い風車」 207 小デュマが寄宿した学校 208 ソラの没した家 209 ツルゲネフ
 の住んだアパート 210 キャバレ「黒猫」 212 ドガの没した家 213 文学カフェ「新
 アテネ」 213 「洗濯船」 214 サクレ・クール寺院 215 テルトル広場 216 「はね
 兎」 216 霧屋敷 219 モンマルトルの風車 220 礼拝堂大通り 222 「北ホテル」 223

フォーブール・サン・トノレからマレーへ……………

- モームの生まれたおシャレ横町 229 『椿姫』の没した家 233 キャブシーヌ大
 通り 234 オペラ座 235 ゴンクール賞を決める料亭 237 コメディ・フランセーズ
 劇場 237 コレットの住んだパレ・ロワイヤル 239 『パリの胃袋』旧中央市場 242
 ユゴー博物館のあるヴォーシュ広場 243 カルナヴァレ館 245

パッシイ、オートウーユとパリの三大墓地めぐり……………

- バルザックの隠れ家 249 アポリネールの家 251 ブルースト誕生の地 251 ゴンク
 ール兄弟の家 252 ペール・ラシエーズ墓地 253 モンマルトル墓地 258 モンパル
 ナス墓地 260

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

せめては新しき背広をきて

きままな旅にいでてみる

萩原朔太郎が、大正のはじめにこう歌ったころ、ヨーロッパへ行くには、インド洋回りの船旅か、シベリヤ鉄道によるしかなかった。船旅では、一カ月以上の日時を費さないと、あこがれの土地は踏めなかつたし、シベリヤ鉄道経由は疲労が激しかった。それを現在は、ジェット機が十数時間で運んでくれる。フランスを訪れる人の数も飛躍的にふえ、観光シーズンには、パリの盛り場に日本人があふれている。「パリ帰り」「フランス留学」といった言葉も何ら特別の意味を持たなくなつた。鳥国根性に閉籠りやすかつた日本人も変わりつつある。さて、パリはたんに物見遊山の気分で出かけていってももちろん楽しい町である。それなりに思い出も残るだろう。しかしそれだけでは、

何かもつたない気持がするのは私だけだろうか。この都市にまつわる歴史や文学の知識を持って訪れれば、旅の喜びはそれだけ大きく、深いものになる。相手次第でどんなもてなし方でも知っている町、それがパリである。

外国をよりよく理解するには、文学を通じるのが一番楽しくて、有意義な方法だといわれる。有史以来二千年の歴史を持つこの町は、これまで数限りない内外の文学者を迎え入れてきた。パリを描いた作品も数知れない。それら先人たちの足跡をたどりながら、より有意義で、印象的なパリめぐりをしたいと考えている読者のために、この本が少しでも役に立てば、こんなうれしいことはない。

なお、本書は、初学者が限られた時間にまとめたものだけに、思い違いや、誤りもあろうかと思う。ご指摘いただければ幸いです。

また、本書の出版に当っては、三修社の沢井啓允氏、石田暎子さんのお二人に非常にお世話になった。厚くお礼申し上げます。



パリの魅力

美の花

パリ。巴里。PARIS。「あなたの訪れたい外国の都市は？」と聞かれて、そのトップに名をあげる人がもつとも多いのは何も日本には限らない。花の都と称えられるパリ。この都市にはいったいどんな魅力的な花が咲いているのだろうか。冬のパリを訪れたわが国のさる高官が「花の都というが、どこにも花は咲いていないではないか」と不平を鳴らしたという不粋な話はさておき、花園・パリには観賞する人の教養、知性の深さによってさまざまな味わい方のできる花が咲き乱れている。本論に入る前に東西の作家の言葉を借りながらパリの魅力について触れてみよう。

数々の名花の中でも一番大輪の花を咲かせているのは、美の花であろう。まずパリの都市美――。

凱旋門、オペラ座、パンテオンなど建築美を誇る建物を大通りの正面に据えた都市づくり。十七、八世紀の古い建物とモダンな高層建築が見事な調和をみせている。新しい建造物の計画が出されるごとに激しい美観論争を展開、建設後もカンカンガクガク議論を続けるフランス人。「美学的見地からみて無価値である」といわれることを極端におそれる彼らの美的感覚が、何世紀にもわたってつくり上げた都市美は、ここを訪れた人たちの心をとらえて離さない。無機質の石造建物に対して、有機質の緑を豊かに配置することも忘れていない。このためパリはどの街角で写真のシャッターを押しても、



サクレ・クール寺院前から見たパリ市

またどこの公園をキャンヴァスにおさめても絵になるのである。

わが国の永井荷風もこの「美の花」に酔いしれた作家の一人で、『ふらんす物語』の中で「最後の日は一日一日と迫って来た。明日の朝にはどうしてもこの巴里を去らねばならぬ。永遠に巴里と別れねばならぬのである。……」

フランス！ ああフランス！ 自分は中学校で初めて世界歴史を学んだ時から子供心に何と云う理由もなく仏蘭西が好きになった。旅人の空想と現実とは常に相違すると云うけれど、現実に見たフランスは見ざる時のフランスよりも更に美しく更に優しかった。嗚呼わが仏蘭西。自分はどうかして仏蘭西の地を踏みたいばかりにこれまで生きていたのである」と惜別の情をのべている。

街並みの美しさのほかにこの都市は「美の宝庫」を

あちこちに持っている。世界最大級のルーヴルをはじめ、印象派美術館、近代美術館……。主なものだけでも五本の指では足りない。これらの、宝庫に収められている古今東西の名画、彫刻をたずね歩く、美術散歩だけでもたつぷり一週間はかかってしまうだろう。複製画や写真でなじんでいた作品の本物と対面したときの喜びはまた格別である。

歴史の花

つぎに魅力的なパリの花は、歴史の花であろうか。フランス革命、パリ・コミューン、レジスタンス運動……などなどパリは世界史の中でも特筆大書される数々を経験してきた。「パリはどの町の片隅にも歴史の一コマが眠っている」（ゲーテ）といわれるように二千年にわたるパリジャンの血と汗がしみこんだ、歴史の現場が至るところにこぼれている。

「パリ、記念碑の中の記念碑。それ自身、記念物としての価値を持っている都、記念碑であるとともに首府である都市。フランス人にとってもつともフランス的なフランスの都」とシャルル・ペギーもいっており、フランス人が「パリは町全体が生きた、歴史博物館であり、パリを知ることとは人類の歴史を学ぶことだ」というのを聞いてもそれほど誇張には聞えない。

パリを訪れる前に世界史を少しでもかじっていかれたら、あなたのパリ観光はとても実り豊かなも

のなること請合いである。さらに文学史、美術史にも関係してくるが、内外の文学者、画家、それに政治家、学者が仮寓かぐした場所に至っては本書でも触れるが実に枚挙にいとまがない。

『新しさの花』

三番目に『新しさの花』。この都市は歴史のこびりついた古い町であるとともに、『新しさ』の町でもある。文学、美術の新しい流れはここから起り、新しい数々の思想、ヌーヴェル・ヴァーグ（新しい波）もここから世界に広がった。そしていまでもその傾向は変らない。由緒ある街並みが大切に保存される一方、モンパルナスやラ・デファンス地区では新しい都市計画に基づいて近代的な摩天楼も軒を連らね、新しいパリのイメージをつくっ

ラ・デファンス地区



ている。

ボードレールも『悪の華』の中で歌っている。

「パリは変わる！ しかし、私の心のわびしさは少しも変りはしなかった！ 新築なった宮殿も、足場も、石材も、古い場末も、すべては私のため寓意となつて、なつかしい思出の数々は岩よりも重い。」

「親しみ安さ」

旅人にパリをもっとも忘れがたくする最後の花は「親しみ安さ」であろう。「気安さの花」といいかえてもよいかも知れない。外国人を珍しがる他の都市と違ってアフリカの黒人はもちろん、東洋人が町を歩いていてもだれも振り返ったりはしない。有史以前から「ヨーロッパの十字路」だった国だけに人種偏見がほとんどないのだ。黒人男性とフランス女性とが肩を抱き合いながら目抜き通りを散歩している姿などはさら。フランス人のお上りのほさんに日本人が道を聞かれることすらある。

「パリに三日住めばパリジャンである」の言葉どおり、この国際都市はどここの国のだれでも気楽に迎え入れてくれる。高村光太郎も『パリ』の中でこの美点を強調している。

「私はパリで大人おとなになった。

はじめて異性に触れたのもパリ。

はじめて魂の解放を得たのもパリ。

パリは珍しくもないやうな顔をして

人類のどんな種族しゅぞくをもうけ入れる。

思考のどんな系譜けいふをも拒こまない。

美のどんな異質をも枯くらさない。

良も不良も、新も旧も、低いも高いも、

凡おほそ人間の範疇はんちゆうにあるものは同居させ、

必然な事物の自浄作用じじようにあとはまかせろ。」

他人に迷惑をかけない限り、金持ちからヒッピーまで自分の好きな生き方のできるパリ。だから一度でもここで生活をしたことのある人は、自分の古里のような親しさを持ってしまふのだ。ジョセフ・イン・ペーカーも「私には恋人が二人いる。わが故郷とパリ」と歌った。この「気楽さ」がここに住む人々の人間性を心おきなく解放、文芸の花をつぎつぎと豊満に開花させてきた。その文芸の花はまた新しいパリの魅力になって人々を惹きつけている。

「パリは全宇宙と同義語である」（ユゴー）は、ちょっと過大評価ではないかと思つても「パリは知性を載せた崇高な船である」（バルザック）という見解には賛成する人も多いことだろう。

「パリジャンとは、パリで生まれた人のことではなく、そこで再生した人のことである。パリに今い